

助成年度：平成19年度

〔所属〕 東京工業大学大学院 社会理工学研究科

〔役職〕 助教

〔氏名〕 笠原 知子

〔課題〕

市街地に残る自然地形の景観評価のための基礎的研究

〔内容〕

本研究は、看過されがちな市街地のありきたりな自然地形の価値を問うものであり、「都名所図会」および「拾遺都名所図会」の地形描写表現をもとに、地形のどのような形姿をどう眺めたのか、人々の地形の楽しみかた（＝意味・価値）を知ることがを目的とするものである。分析は①地形描写表現の抽出、②地形図上での位置確認、③分析対象選定、④地形透視図の作成、および図絵類・現地調査・描写確認によって、地形の見えに対応する地形の眺め方を把握する、という手順で行った。その結果、市街の自然地形について、単に自然がある・見えることのみならず、見えかた・見かたに意味があったこと、人々は身近な地形と、意味的にも身体的にも様々な関わりかたをしていたことを確認し、今後の景観評価に対して有益な知見となりうる、以下の内容を明らかにした。

〔山へのまなざし〕 身近な山々への意味づけは、峰やくびれといった姿形的特徴に加え、月の出方や季節など限定的な身体的体験に基づいて行われている。また、眺めるだけでなくアクセスする対象として、町と山中を対比的に感受できるような一連の体験が重要である。〔水へのまなざし〕 身体的に水と関わりつつ、水面越しに地域の山水の全容をとらえる例が多い。加えて、池の水面では、山の容姿・季節や時刻など、身を取り巻く状況を限定的に映しこむ装置となっており、日常的な・あたりまえにある自然地形を、非日常化することで、人と環境との関係を意識化する仕組みを見ることができる。〔地勢（眺望）へのまなざし〕 眺望景は、構造的なバランスへの関心よりも、様々な対象に視線をめぐらせながら、一幅の絵巻物を眺めるような鑑賞態度が特徴的であり、その基盤には、自身の住まう町・その町の基盤となる自然地形の諒解への指向があるものと考えられる。